

『アジア太平洋討究』No. 14 (March 2010)

マラヤの武装闘争に加わった日本人

原 不二夫[†]

Japanese Communist Guerrillas in Malaya

Fujio Hara

Based both on the Japanese military documents recorded during and soon after the end of the Pacific War as well as on the various memoirs published recently by the Malayan Communist Party (MCP) members, this article traces the loci of the Japanese who participated in MCP's guerrilla struggle against the British imperialists and then the Malayan (Malaysian) "reactionary" governments. Total number of the Japanese guerrillas is said to be between 200 and 400. They included not only ex-soldiers who had been stationed in Malaya but also civilians who had worked in Japanese enterprises during the occupation period. They were resolved to stay in Malaya in order to liberate Malaya from the colonial rule, that is, to realize the promise that the Japanese armies had actually no intention to implement.

While 17–19 individual names (noted as deserters) could be identified from the Japanese documents, only 3 Japanese names could be known from the MCP sources. Besides them, several Chinese or Malay pseudonyms of the Japanese are referred to in the latter.

In accordance with the order of the then Secretary General of the MCP, Lai Teck, dozens of them were executed soon after joining the guerrilla forces. Remained Japanese guerrillas played important roles mainly as military engineers or as medical specialists. By around 1960, except for 2 persons, Mr. Tanaka and Mr. Hashimoto, both of whom were to return to Japan after the conclusion of the Peace Treaty of 1989, all disappeared. They either died in the battle or due to disease, or surrendered. Mr. Tanaka and Mr. Hashimoto are praised and respected by their ex-comrades as internationalist fighters.

はじめに

1989年12月にマラヤ共産党とマレーシア政府、マラヤ共産党（以下、「マ共」と略す）とタイ政府の間で個別に和平協定が結ばれてマ共の武装闘争が終結し、当初からゲリラ隊員として闘争に参加していた2人の日本人、橋本恵之氏（1917～1997年）と田中清明氏（1912～2000年）とが翌90年初頭に日本に帰国したことは、当時日本では広く報道された。この時両氏は、他に名前が判るだけで少なくとも20人の日本人がゲリラに参加していた、と述べていた。インドネシア残留日本兵については、その規模や役割などについて様々な分析がなされ、これらの人々の詳細な伝記、回想記も著わされているが、マラヤの残留日本兵、日本人については、両氏の帰国後も研究が進展したとは言い難い。

筆者は1991年に、終戦直後の創刊から1950年に発禁処分を受けるまでのマラヤ（現マレーシア）、

[†] 南山大学外国語学部アジア学科

シンガポールの左派系2華字紙の報道を元に、どのような日本兵、日本人が共産ゲリラに加わったかを見た。ここで知り得た事柄は、次のようなものだった。なお、ここで日本兵と日本人とを分けているのは、「日南製鉄」に勤めていた橋本、田中両氏のように占領下の日本企業で働いていた人々も何人かいたからである。なお、以下、引用文中の（ ）内は原注、[]内は筆者＝引用者注である。

1. ゲリラ内には、全体で恐らく100人ほどの日本兵、日本人がいた。
2. 当局が「交戦した日本人暴徒」として名前を公表した中で、密林に消えた人物には、夏示野[星野？、細野？]、夏示摩多[橋本？]、米也摩多[宮本？]、大園、阿沙奴[浅野？]がいる。
3. ゲリラに加わろうとしていたとして1948年6月20日[イギリス植民地当局がマラヤ全土で左翼勢力を一斉逮捕した日である]に逮捕された人物に、元日本軍医の高橋柳太郎大尉がいる。
4. ゲリラ訓練にあたっていた元日本軍医1人が48年8月に逮捕されている。
5. 1956年に交戦死した宮谷勇氏が、国境タイ側に埋葬されている¹。
6. 上記には記事1件の見落としがあり、それによれば、次のような日本人がクダ・プルリス警察から指名手配されている。

大野 別名 和蘇魯[細野？]：東京出身。46歳。身長4尺10寸～4尺11寸[約160cm？]。日本語の他、英語、マレー語ができる。戦前日本で銀行に勤め、戦中はクダで製材所の事務を担当していた。胃病を患っており、食は細い。読書と体操を好む。

4件の謀殺事件に関与し、うち1件は1947年の警察への手榴弾投げつけ。最後に現れたのは1949年1月13日北クダのバタ[Bata]で、匪徒[ゲリラ]の指導者になっていた。彼には1万海峽ドルの懸賞金がかけられている²。

7. 元憲兵隊員の回想記に、1944年11月、タイピン憲兵分隊の前田光雄軍曹が人民抗日軍第5独立隊に「入隊志願書」を書いたあと「敵前逃亡」し、戦後も行方不明のままになっている、との記述がある³。

さらに、1995年に「日本のマラヤ・シンガポール占領期資料調査フォーラム」の聴き取りに対して橋本恵之氏は、次のような点を明らかにした。

1. 橋本氏も田中氏も、1944年からクダ州スンガイ・パタニ(Sungai Patani)の軍関連企業、日南製鉄で働いていた。
2. 日本人ゲリラは、200人以上いた。元兵士が多かった。
3. 「大丸」の関係でクダ州で仕事をしていた細野栄次郎氏(群馬もしくは岐阜の出身)の働きかけを受けて、「日本人の悪いイメージを独立運動で取り返」そうと「会社の親しい仲間7人が1945年9月17日にゲリラに加わった」。
4. 大抵は戦死し、病死も多かった。離散して敵に捕まった者もいた。イギリスの捕虜になって帰った者もいた。1人は歳を取っていたので返した。大丸スンガイ・パタニ出張所長だった人は、1952、

- 3 年頃出て行った。1 人の元兵士は、タイの監獄に入ったあと日本に帰った。逃げ出した者もいた。
5. 細野氏は入隊の約 3 年後に病死した。
 6. 日本の家族は、橋本氏がゲリラに加わっていることを「ロイター通信か何かで」知り、1956 年頃弟が飛行機から 5 万枚のピラを撒いた。
 7. 1960 年頃全体会議が開かれた時、参加した日本人は 2 人だけだった。他に参加できなかった者が 3, 4 人いたが、彼らは皆間もなくいなくなった。

橋本氏から話を伺った後、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科の村嶋英治教授から、タイ公文書館所蔵文書に「日本籍中国人匪賊グイロン（もしくはクイロン）」がタイ警察に出頭したとの 1954 年 3 月 26 日付の報告⁴がある、とのご教示をいただいた。この点について改めて橋本氏に電話で伺った⁵ところ、次のような答えを得た。なお、クイロンについては後にまとめてやや詳しく触れる。

クイロンは日本軍の上等兵（衛生兵）だった。四国の高松近くの出身で、名前は確か岩崎^{たかし}といった。何か勘違いして逃げ出してタイに行き、牢獄に入った。何も秘密情報は売っていない。投降は何人かいたが、それとは違う。日本で訪ねてみたいとは思うが、消息は聞いていない。

特務機関・茨木機関（正式名称は岡機関。機関長は茨木誠一少佐）⁶の機関員・本田忠尚が戦後著わした回想記の中に、要旨次のような記述がある。

1945 年 7 月始め、ジョホール州コタチンギ〔コタ・ティンギ〕近くで、機関員の矢部 徹^{たかし}が「マレー共産軍」独立〔抗日軍第 4 独立隊のことと思われる〕第 7 中隊第 1 小隊に捕まって山の中に連行され、ある部落で逃亡日本兵 2 人に会った。1 人は「27, 8 歳で、四国松山の出身だと言った。昭南〔シンガポール〕から逃げてきて共産軍に入った。もともと共産主義者で反戦思想の持ち主だったらしい。いつも暗い感じの男であった。もう 1 人は仲間の金品を盗んで逃亡してきたといった。思想的背景はなさそうであった。見るからにいやしげな男だった」⁷。

見ず知らずの人間に「金品を盗んだ」などと言うだろうか、という疑問が湧くし、この作者にはかなりの偏見が感じられるが、それは措く。ともかくここから、すでに敗戦前にゲリラに加わった兵士のいたことが確認できる。

全くの偶然だが、筆者の高校の同級生だった宮坂孝康氏が、大学生時代アルバイトで働いていた個人会社の経営者、藤岡^{ひさのり}寿典氏は、マラヤ共産党ゲリラに加わって 2, 3 年間戦った後、日本に帰ってきたという。徳島県三好市^{い や だ に}祖谷溪出身だったという⁸。

この他、以前 NHK のラジオ放送で、かつてマ共ゲリラに加わっていたがその後離脱し、日系商社、シンガポール日本人会で働いた佐々木という人の「自伝」を聞いたことがあった。おぼろげな記憶しかなかったのでインターネットを検索したところ、要旨次のような文章を見出した。

佐々木賢一：1916年静岡県生まれ。日大卒業後三井物産入社。1941年12月の第25軍シンガラ上陸に参加。シンガポール占領後召集解除で三井物産に復帰。戦後クアラルンプールで送還を待っている時、マ共の呼び掛けに応じてゲリラに加わる。タイ国境近くの山中に籠って英軍と戦った。旧日本兵は多い時には約300人いたが、戦闘で多くが命を失った。マラヤ独立後、「独立のための戦い」という大義が失われたため隊を離れ、林慶端[瑞の誤りではないか…引用者]という偽名を使って華人社会の中で暮らし、華人女性と結婚した。1960年に日本大使館に「日本人・佐々木だ」と名乗り出、三菱商事に5年間勤務した後、シンガポールで旅行会社を始めた⁹。

この文章の「情報源」を探したところ、シンガポール日本人会の『南十字星記念復刻版』（1978年）にそれに違いない文章を見出すことができた。この文章によれば、

- ① 元日本兵は多い時には300人ほどになっていたが、2年半に及ぶ抗英ゲリラ戦の間に次々と死んでいった。
- ② マレーシア独立[1957年のマラヤ連邦独立を指すと思われる]後、独立という目標を失い、望郷の念も強くなってクアラルンプールに出た。
- ③ 林姓の中国人女性と結婚し、林慶瑞を名乗った。
- ④ 1960年に日本領事館[大使館領事部のことか]に名乗り出た後、三菱商事に勤め、5年前[1969年]に独立してシンガポールで旅行社を始めた¹⁰。（下線は引用者）

Internet 情報と多少のずれがあるが、当人からの直接の聴き取りをもとにした後者の方が正確なのであろう。それでも、佐々木氏がゲリラを離れたのは2年半後（つまり1950年末頃）なのか57年の独立後なのかについては、曖昧さが残る。

以上が、これまでに日本で知り得た事柄である。ところが、近年公刊されたマ共関係者の回想記に、橋本、田中両氏の他にも日本人ゲリラへの言及がいくつか散見される。そこで本稿では、マ共関係者からの聴き取りも交えてこれらを整理し、どのような日本人がゲリラに加わって、どのような活動を行っていたのか、彼らは何を目的に敢えてこのような困難な道を選んだのか、などを検討したい。

その前に、まず準備段階として、防衛研究所図書館史料室所蔵の日本軍側資料をもとに、日本が把握していたゲリラ参加者の名前を探してみたい。

一 日本軍記録に見る脱走者、逃亡者

以下、基本的に脱走・逃亡時期順に見ていくが、文件ごとに取りまとめる必要もあるので、時期は多少前後する場合もある。

1. 1944年6月28日 ジョホールバルにて兵1名逃亡¹¹。
2. 1944年9月10日 ジョホールバル市にて兵1名逃亡¹²。

3. 1945年8月20日 ジョホール州ゼマラン [Jemaluang?] において下士官連絡を断ち、生死不明¹³。

4. 1945年9月11日 兵長・西島美之、兵長・熊谷熊一、逃亡。

西島は、クアラルンプール市内で連合軍進駐に備えて隊貨の移送に任じていた際、人員点検で逃亡を発見。兵舎に「国家の将来を慷慨し逃亡を決意した」との遺書を残していた。熊谷も「西島と共に逃亡せるものと認む」と記されている¹⁴。

5. 1945年9月11日 クダ州「スンゲイパタニー」[スンガイ・パタニ] において兵1名逃亡、生死不明¹⁵。

6. 1945年9月14日 離隊逃亡者 将校1, 下士官8, 兵5¹⁶。

7. 1945年9月15日 離隊逃亡者 下士官1, 兵2¹⁷。

8. 1945年9月16日 離隊逃亡者 兵1¹⁸。

9. 1945年9月21日 兵1逃亡。マラッカ州「アログジャ」[Alor Gajah] 馬來人小学校に収容中だった¹⁹。

10. ある工兵部隊は、「終戦後左記の如く兵逃亡せり」として次のような兵士名を挙げている。

10-1 1945年9月16日 北部馬來「グレン」[Gurun?] において、特設中隊陸軍上等兵、小野寺初男、同 前田八郎。

10-2 1945年9月20日 北部馬來「ビドン」[クダ州 Bedong] において、第2中隊陸軍衛生一等兵・岩崎哲夫、同陸軍一等兵・尾下正美、同・松下友一、同・北条菊雄。

1945年10月1日 北条菊雄、帰隊。11月1日 尾下正美、松下友一、死亡確認。

11. ある歩兵連隊の「略歴」には、次のように記されている。

終戦以来(1945年8月15日から1946年まで)離隊逃亡の俣行方不明なる者、下士官兵6名²⁰。

12. 「野砲兵第94連隊部隊略歴」に「死没者並に逃亡者 別紙第1, 2の如し」と記されている²¹が、別紙は付されていない。

13.

14. 1945年11月24日。倉持喜八(経理部、陸軍技手、本籍・東京)、ジョホール州レンガム [Renggam] で逃亡。

「備考」として次のような記載がある(旧漢字・片仮名書きを新漢字・平仮名書きに改めた。以下も同様)。

少年期両親と共に長期間馬來に在りたることあり。支那語堪能にして、又戦時勤務中に於ても現地人との交際広きものあり。嘗て方面軍経理部に勤務中事故の現地状況に詳なること及支那語に堪能なる[ことの]為、特務機関勤務を希望せんことあり。前期の如き性格を有するものとて部隊としては妻子ある身の軽率なる行動をせざる様訓戒、其の行動に付厳に注意しありたるも、昭和20年[1945年]11月24日、偶々台湾出身陸軍主計少尉長岡亮(台湾人キャンプより本国に帰還せり)と共に17.00より外出し其俣帰隊せず逃亡す。部隊は直ちに関係上司に報告すると共に主力を以て「レンガム」市街「ラヤンラヤン」[Layang-Layang] 地区を搜索せんも不明にして其後帰隊せ

ず²²。

15. シンガポール憲兵隊の「逃亡者名簿」には、次のような記載がある²³。

15-1 憲兵長・岡本猛：昭和 20 [1945] 年 9 月 13 日「シンガポール」「ジュロン」キャンプより逃亡、馬來半島に渡りたり。風聞によれば既に帰還せりと。

15-2 伍長・丹沢良三：逃亡右に同じ。馬來半島「アイルイタム」[Air Hitam] に於て現地人の為殺害されたりとの風聞あり。

15-3 兵長・大野良一：逃亡右に同じ。馬來半島「セガマツ」[Segamat] に於て自決せりととの風聞あり。

15-4 憲上兵・宮森茂：逃亡右に同じ。一度馬來半島に渡りたるも其の後「レンパン」[Rempang. 連合軍の設けた収容所があった] 島より帰還せりと。

16. 元砲兵隊員の回想記に、要旨次のような記述がある。

終戦直後、帰って来る英軍にいじめられると思ったので、馬來共産党工作を行った。北部馬來共産党首脳部に台湾人で日大を中退し国外追放になったという林というものがいると判っていたので、まず彼との連絡から始めた。共産党は武器などを大変欲しがっていたので、どうせ英軍に引き渡すものであり吾が部隊には員数外も多いので出来るだけ多く彼らに渡して、その代り英軍からいじめられた場合に陰から少量ずつでも食糧の補給などして助けてもらう約束でもしようと考えたためである。この連絡には第 29 軍から転属して来た鬼塚少尉が当たった。話は順調に進みピストルなど一部の引き渡しを始めた段階で、思いがけないことが起った。この頃共産党から日本軍将兵への勧誘が盛んだったのだが、鬼塚少尉が共産側に見込まれてこれに入って残りたいと言い出した。これをやめさせて帰ってみると、本部書記の北川曹長以下 8 名がトラックに重機関銃 2 挺を積み山に入ってしまったとのことだった。連れ戻そうとして連絡が取れない間に英軍の命令でビドール (Bidor) 集結となって、この工作は大失敗に終わった。この逃亡の結果、堀曹長、村上兵長は現地山中で病死という結果になった。後に部隊主力がレンパン島にいる頃、北部マレーの第 29 軍から「北川曹長、西中軍曹など 6 名が出頭して来たので近く軍法会議がある」旨の連絡があった。この 8 人の大部分は、余り事情が判らず、工作に運転手として同行していた三木善太郎が共産党から誘われてそれを北川曹長に伝え、「乗れ乗れといった」状況で乗車したらしい²⁴。

終戦で武装解除に備えていた頃、将校以上は絞首刑で下士官は去勢、兵は日本に返す、といった情報が流れてきた。将校は別として下士官に「大動揺」が見られた。吾身の対処を真剣に考えざるを得なかった。そのうち「堀、北川、西中の連中」がマライ共産軍と連絡を取っていち早く逃亡していった²⁵。

脱走もしくは逃亡した日本兵が総てゲリラに加わったとは限らないが、上記から、ゲリラに参加したことが確定できる者、あるいはその可能性のある者で、脱走・逃亡直後に帰隊もしくは死亡した者以外の名前 [上記にアミカケした] を整理すれば、次のような 17～19 名になる。なお、脱走した「昭南憲兵」は、マラヤ共産党は愚か住民全般の恨みを買っていたためもあり、ゲリラに加わった可能性は低く、「風

聞」の真偽はともかく、ここでは除外した。

細野栄次郎(＝星野?)、橋本、宮本、大園、浅野、宮谷勇、大野、前田光雄、岩崎(恐らく岩崎哲夫)、藤岡寿典、西島美之、熊谷熊一、小野寺初男、前田八郎、倉持喜八、鬼塚、三木善太郎。

二 マラヤ共産党文書に見る日本人ゲリラ

ここでは、マラヤ共産党関係者の近年の回想記に現れた日本人ゲリラについて整理したい。まず全体像がどのように記されているかを見た後、個々の人物について足跡をたどることとするが、その前に、日本軍とゲリラとの終戦前後における接触が共産側にどう記されているかを簡単に見る。

1. 日本軍とゲリラの接触

敗戦前後にゲリラ側が日本軍側に武器の引き渡しを求めて密かに折衝がもたれたこと、あるいはゲリラ側が日本軍側に対英戦争での協力を求めたことなどについては、日本軍関係者のいくつかの証言がある。上記の本田忠尚の書はその一つで、この中で本田は、ゲリラの分隊長が捕虜になった茨木機関(岡機関)員・矢部をコタ・ティンギの日本軍に送り届ける際、「武器をくれるよう交渉してくれと頼んだ」と記している²⁶。ペラ州に駐在していた憲兵、関道介はタイピンから山の中に入った共産軍本部で「共産軍総司令・陳平」と交渉し「日本軍の員数外の武器を渡すこと」で合意した、と述べているが²⁷、交渉相手については記憶違いだったことが確認されている。

マ共側では、元幹部の張明今(*Zhang Ming Jin*)氏がすでに1991年に、「日本軍降伏後、タイピンにあった29軍司令部から全権代表が来てマ共代表・房春来(*Fang Chun Lai*)と交渉し、抗英協力のために日本軍とインド国民軍をマ共の指揮下に入れてもいいと提案したが、党最高指導部はイギリスと結んだ協定を破ることはできないと拒否した」と証言している²⁸。1992年に香港で出版された元ゲリラ関係者の回想記には、おそらく同じ事柄が要旨次のように綴られている。

タパー、トゥルク・アンソン[現トゥルク・インタン] 一帯の日本軍が抗日軍第5独立隊第4中隊に人を派して、日本軍とインド国民軍を抗日軍の指揮下に入れて共同でイギリスと戦おうと提案してきた。5独司令部は房春来に交渉に当らせた。5独司令部は、連合軍との約束に背くのは信義にもとるとして、武器は受け取るが共同抗英はできない、と拒否した²⁹。

(上記の日本軍が)タイピンの軍政監部の意を受けて第4中隊に“連合抗英”を提案してきたが、5独司令部は、当時の情勢を分析した結果、日本軍の提案は協力を隠れ蓑にイギリスに徹底抗戦しようとするもので誠意に欠ける、と判断して断固拒否した³⁰。

同書はまた、後段に続けて、

小隊規模の日本軍、個別の下級軍官、兵士が武器を携えて抗日軍に投降する例がかなりあり、大多数の独立隊は彼らを受け入れた。閩南語[福建語]や普通語[北京語]ができる者もいて、彼らは平民に仮装させて地方に移し、農村で開墾に当らせたり遠方へ送って住民に変装させたりした³¹。

コタ・ティンギでの交渉については、元人民抗日軍第4独立隊員の次のような回想がある。

日本投降時に、盧成 (Loh Seng)³² は4人の命を受けて日本兵捕虜5人をコタ・ティンギの岡部隊に送り届けた際、責任者の少将と筆談で話し合った。武器の提供を求めたところ、「イギリスと戦って建国しようというのであれば協力するが、条件がある、それは、(1) 建国後、何万人という日本兵をマラヤ公民とすること、(2) 合同指揮部を設け、自分にその一角を占めさせること。抗日軍側は日本語ができず日本兵を指揮できないからだ。受け入れなければ武器も提供できない」との答えだった。一旦戻って盧成に報告し、日本兵營に引き返して要求は受け入れられないと回答した。少将は日本兵に、我々に同行して衣服、食糧、銃27丁、弾薬10箱などを届けるよう命じた³³。

クダ州については、要旨次のような回想がある。

日本降伏後、バリン (Baling) 駐在の日本兵の一部がやって来て人員、武器ともどもの受け入れを求めたが、ゲリラ側は武器だけを渡すよう求めて人員は拒否した。彼らの帰路を待ち伏せて武器を奪おうとしたが失敗し、関係は行き詰った。この経験を生かしてクダ中部では柔軟に対応することとし、10余人 (田中清明、橋本恵之を含む) を受け入れた。彼らは積極的に武器を運んできた。クリム (Kulim)、クアラ・クティル (Kuala Ketil) などに駐在していた警備隊にも武器提供を求めたが、彼らは上からの指令がないことを理由に拒否した。粘り強い交渉の末、日本兵から合わせて100丁ほどの銃と大量の弾薬を得た。

党中央の指示が遅々として伝わらない中、1943年の党「抗日9大綱領」に基づいて「クダ人民抗日軍」を「マラヤ民主共和国」実現のための「解放軍」に名称変更した。しかし45年8月下旬にやって来た陳平同志の指示に基づいて「解放軍」は「抗日軍第8独立隊」となった。バリンの日本兵から「解放軍」名義で一部の武器を受け取るようになっていたが、この再変更は日本側の反感を招き、以後接触を拒絶された³⁴。

日本軍投降後、クダ中南部に駐屯していた日本軍200人余りが、抗日軍に投降して共同でイギリスと戦う意向を示した。しかし信頼できなかったので拒否し、一部の武器だけ受け入れた³⁵。

終戦時ライテク (Lai Teck) 書記長の右腕として頭角を現していた陳平 (当時マ共ペラ州委書記。ライテク解任後の47年からマ共書記長) は、全体を総括して要旨次のように述べている。

8月16日の日本降伏の玉音放送後、数時間を出ないうちに、ヌグリ・スンビラン、ペラ、クダなどマラヤ各地の日本軍司令部から、我が党と同盟を組んで植民地軍と戦いたいという提案がなされた。ジョホールでは、やや下級者からの提案だった。党州委員会で口角泡を飛ばす議論が行われた。クダでは阿和 [陳凱の別名] が同州の日本軍司令官と統一部隊の設立を目指して交渉し、ペラでは州委副書記の愛克 (Ai Ker) がタイピンの日本軍政監部 (シンガポールから移って来ていた) で高級指揮官 (少将) と全マラヤの日本軍の統制について話し合った。少将は「共產軍が英軍と戦うなら

全面的に協力する」と提案したが、愛克は回答を2,3日待つように求めた。間もなくマ共中央は闘争停止を決めたため、提案が陽の目を見ることはなかった³⁶。

一方、1970年にマ共中央から離れて結成された「革命派」の指導者・全仲仁は、「2万人の日本軍が人、武器ともども抗日軍に投降し、アジア人のために手を携えて、戻って来る英軍と戦おうと提案してきたのに、マ共中央は峻拒してしまった」と記している³⁷。

マ共側は、日本軍中枢が全駐留軍の抗日軍への投降もしくは抗日軍との提携を提案したとしているわけだが、日本側の記録では交渉にあたったのはずっと下位者で、しかも一部地域の軍隊を代表していたにすぎないようだ。いずれが事実だったかを確定する材料はないが、クダ中部の例に見られるようにこうした接触が日本兵のゲリラ参加の1要因になったことは疑いない。

2. 日本人ゲリラの全体像

張明今氏は1996年2月25日付の筆者宛書簡で、戦争中何人かの「日本反戦同盟」に属する日本兵が投降してきたが、ライテクが「日本兵なら自分がスパイであることを知っている恐れがある」と判断したためか殺害を命じ、全員が殺害された、と記していた。

一方、陳平書記長は、1999年2月22,23日にキャンベラのオーストラリア国立大学で開かれた「マラヤ非常事態検討会 Malayan Emergency Workshop」で次のような点を明らかにした。

イギリスの統計によれば、全マラヤで200人程の日本兵がゲリラに加わった。クダでは20～30人ほどだったが、投降、戦病死で最後は2人だけになった。ペラでは100人以上が入ってきた。大小2組あり、10人ほどの小さい組はスンガイ・シプト (Sungai Siput) に駐屯していた。彼らは勇敢で、戦闘では常に前線に立った。1,2人は投降した。50～60人の大きな組は〔終戦直後〕クアラ・カンサル (Kuala Kangsar) 近くに駐屯していて、我々にとって大きな問題になった。彼らは、我々が政策を転換して抗英戦争を行わないと決めたことを知らず、投降しようとしなかった。我々がイギリスと戦わないことを知ると、彼らは出て行った。投降したり、インドネシアに行って独立戦争に加わったり、タイ経由で日本に帰ろうとしたのだろう。60～70人が残った。彼らの処遇に困り、ペラ州委はライテクに報告した。ライテクは処刑を命じた。その後なお、100人以上の日本兵が残った³⁸。

この点は、陳平書記長自身の回想記では、要旨次のようになっている。

終戦直後のマ共の「抗英戦争行わず」決定で日本軍との広範な協力の可能性は消えたが、400人程の日本人が密かに我々の隊列に加わるのを妨げることはならなかった。日本兵は基本的に人種主義者で、白人に屈服することを肯んぜず、われわれと組んでアジア人連合を作り、白人植民地主義者に対抗しようとしたのだ。日本兵との協力の是非が党を二分する恐れがあった（大多数が対日

本兵協力派だったろうが)。最高指導者ライテクからの武装解除命令が、党の結束を守った³⁹。

抗英戦を行わないとなったことで、多くの日本人が出て行った。ほとんどがタイ、ラオス、南中国経由で日本に帰ろうとしたのだと思う。1, 2人はイギリスに捕まった。密林で死んだ者もいたろう。しかし中核は残った。彼らは少人数に分かれて各地の無許可入植者の村に入り住民になりました。時が来れば密林の我々に合流する手筈だった。

1945年末の何ヵ月か、資金、食糧の不足が深刻化した。日本人が少数の村では大した問題にならなかったが、100人程が加わったペラ州クアラ・カンサルでは事態は深刻だった。戦闘がないことで半分以上が出て行ったが、なお残った20～30人を養わなければならなかった。彼らは華語もマレー語も英語も話さなかった。ペラ州委書記の愛克は、ライテクに、「同地の党員が日本人をかくまっていることが露見する恐れがある」と報告せざるを得なかった。一週間ほど後、「抹消せよ」との命令が届いた。日本人は、疑いを招かぬよう2, 3人ずつに分けられて、「訓練のため」として密林に連れて行かれ、処刑された。1945年末か46年初のことだった。この頃ライテクはイギリスとの関係を復活させており、英当局はこの件を承認していたはずだ。

その他、クダに20人程、ペラに別の集団10人程、ジョホール州に少数がいた。彼らは少人数だったので重荷にならず、ライテクに報告せずに済んだ。彼らは、非常事態が始まると我々に合流して再び戦士となった。以後、戦死者も投降者も出た。イギリスは、名前を突き止めた者にスパイ戦を仕掛けた。日本の家族や友人に接触して手紙を書かせ、印刷して密林の上空からばら撒いたりした。これらを見て投降した日本人は一握りにすぎず、出費に見合う成果からはほど遠かった。日本人の過半数は戦死だった⁴⁰。

前段の400人という数字と後段の数字とは整合性に欠けるようにも思えるが、ともかく400人程の日本人がゲリラに加わって、少なくともクアラ・カンサルの20～30人がライテクの命で処刑されたことになる。

3. 各地の日本人加入者

(1) クダ州については、次のような記録がある。

- ① ジンジャン (Jinjang) 製材所の日本人経営者 (少佐。華語名は温和記。妻は華人) が、使っていたオースティン車などを抗日軍に送り届け、ついで大尉、軍医、機械士、工兵、運転手など12人の「官兵」を率いて抗日軍に投じた。皆華語名に改め、農民に化けて、潮州人野菜農民と働いた⁴¹。
- ② 日本敗戦後、田中清明、橋本恵之、常岡達吉等8人がグルン (Gurun) で抗日軍地下組織に入って農村工作を行い、抗英戦争勃発後いずれも抗英の隊列に加わった⁴²。
- ③ クダ州の農村で地下活動をしていた時、20～30人の日本人同志がいた。そのうちの一人が清徳同志 [田中氏] だった。彼らの中には後に投降する者、英軍に見つかって連れ去られる者も出た。英軍は村を取り囲んで、華語もマレー語も話せない者は連れて行った⁴³。
- ④ 1948年8月にクダ北端セントク (Sentok) 山で結成された「ペナン・クダ州人民抗英軍」[49

年2月の「マラヤ民族解放軍」⁴⁴ 結成に伴ってその「第8支隊」に]の第3独立分隊[48年6月25日結成]は、40人余りを擁し、うち10余人は日本人志士だった。彼らは戦後密かに抗日軍に投じて、抗日軍の手配でタイ国境の鉱山で働いていた。8支の用いた地雷は、彼らの製造したものだ⁴⁵。

- ⑤ 全マラヤで抗英運動に参加した日本人は三十数人で、このうちクダには17,8人いた。この尊敬すべき日本の友人達は、長い困難な闘争の中で大多数が犠牲になった。田中、橋本両氏は、幸いにも生き延びることができた⁴⁶。
- ⑥ 田中清明氏自身は、日本帰国後娘に、「我々の日本人仲間は20人ほどで、外科医療技術、軍事工事、武器弾薬方面の知識を持っていた。ただし、この[抗英]戦争は、我々大和民族の優越感をすっかり洗い流してしまい、我々に人から学ばなければならないことを教えてくれた」と語ったという⁴⁷。
- ⑦ クダ中部で10余人がゲリラに加わったとの記述があることは、先に見た。

クダ州では、6件の情報のうちに重複があるかも知れないが、少佐を最高位として数十人がゲリラに加わっていたことになる。

- (2) ペラ州タイピンでは、戦争終結時に日本人29人が抗日軍に加わっており、中には軍官の Chin Kian [陳建?]、軍医がいた。のち、主要人物2人は死亡し、多くは投降した、との証言がある⁴⁸。
- (3) クランタン州については、次のような「捕虜」「投降」の記述がある。

1945年7月、ムラポー(Merapoh)での抗日軍と日本軍との戦闘で、負傷した日本人を捕虜にした。軍人でなく文化教育関係者で、山田と名乗った。

日本軍降伏後、クアラ・クライ(Kuala Kelai)の日本軍頭目・南勇一が英軍への投降を望まず、何人かの漢奸[漢民族の裏切り者。対日協力者]やスパイを糾合してかなりの食糧、武器を携え山中にこもった。我々[ゲリラ]は様子を探ったあと山田に日本語の手紙を書かせて抗日軍への投降を呼びかけた。その結果、南ともう一人の軍官・石川信吾が投降してきた。彼らは抗日軍との共同抗英を望んだが、部隊は連合軍との合意を守り、45年9月末に山田、南、石川の3人を連合軍に引き渡した⁴⁹。

前掲の拙稿「マレーシアの残留日本兵」が出た年の末、『朝日新聞』に次のような要旨の記事が掲載された。

南勇一は1942年1月からクランタンの州都コタバルに憲兵曹長として駐在し、華僑への厳しい取り締まりのため「大上皇」と恐れられた。地元の華僑女性と結婚し、この女性が仲間をかばった。南は戦後「現地で戦犯として捕まり、病死したとされる。宮城県の実家には、46年8月18日付で死亡の通知が届いた。27歳だった」⁵⁰。

南は実は、46年6月末に戦争法廷で裁判を受けるためクアラルンプールからコタバルに護送される途中逃走したが、8月7日に再逮捕され、タイピンで獄死した⁵¹。南がクランタンで虐殺した「僞胞」は100人を下らないとされており⁵²、共産党側は共闘を受け入れるわけにいなかったであろう。

(4) パハン州については、1948年6月初、トゥムルロー (Temerloh) 近くでマレー人青年が私設兵営に集まって軍事訓練を受けた際、教員は元マレー連隊兵や元日本兵だった、との回想記がある⁵³。

(5) 南タイの根拠地における日本人については、次のような記録がある。

① 1952年頃、タイ南部の第8支隊第3独立分隊の駐屯していた村で、何人かの日本兵を収容した。彼らは、英軍への投降を望まず、密林に隠れ、しょっちゅう付近の農村に出てきて米などをもらっていた。住民は彼らを恐れ、また同情もしていた。ある日、彼らが共産党を探していると言ってきた者がいる。我々が彼らと接触したところ、彼らはすぐに武器を差し出し、自分たちを受け入れてくれるよう求めた。我々は彼らをしばらくゴム工場に住ませ、毎日水や食糧を届けた。間もなく司令部から、彼らを部隊に連れてくるよう命令があった。彼らの部隊での活動は立派で、実に勇敢だったという。この後、我々はしょっちゅう貴竜 [Gui Long] という名の日本人医師に農民の病気を診療してもらい、人々から歓迎された⁵⁴。

② 1950年に南タイの基地に入り、2年間の軍事訓練の後、医学を学んだ。先生は日本人で、部隊には十何人かの日本人同志がいた。宏光 [Hong Guang] は獣医、貴竜は軍医だった。大部分は大学教授だった。阿福 [橋本氏] は武器の専門家だった。彼は鍼灸も音楽もでき、私たちに日本の歌や踊り、柔道を教えてくれた。党が彼らに然るべき待遇を与えなかったためらしく、出て行く者がいた。敵の砲火の犠牲になる者も出た。

阿福他3,4人の日本人同志がまず分かれて出て行き、自分たちの小隊を作ろうとしたが失敗した。食べるものがなく、農民のタピオカを盗んだり乞食をしたりして1年余り徘徊した。住民から知らせがあり、党は彼らを連れ戻した。帰って来たとき、彼らは痩せさらばえて髪もヒゲも伸び放題だった。組長は処刑され、その他も逃亡の処分を受けることになった。しかし後に検討した結果、この人物を処刑すべきでなかった、彼らを処分はするが殺すべきでない、との結論に達した。阿福その他の人々は、彼の髪の毛と指の爪を切って保管した。日本人の習慣なのだろう⁵⁵。

国境タイ側の山中に戦後7年余りも潜伏していた日本兵がゲリラに加わった、というのは驚くべきことで、先述のクイロンはその一人だったのである。

(6) 日本の監獄内の反戦分子

ゲリラに加わったわけではないが、日本兵の中には占領初期の段階から戦争に疑問を抱いて軍令に背いた兵士がいたようだ。マ共関係者の記録によれば、1942年8月、シンガポールのオートラム (Out-ram) 監獄に24人のマ共幹部が投獄された際、牢屋は5室あり、そのうち2室に「反戦分子その他の日本人」が収容されていたという⁵⁶。こうした事柄を裏付ける日本側資料は見つかっていない。

この時期同監獄で処刑されたマ共指導者が密かに書き残した記録には、要旨次のような記述もある。

反戦行動や軍紀違反などのために収監されていた日本兵は、かつて〔45年6月頃?〕の24人から今〔8月頃〕は82人になった。看守のなかにも日本の反戦の兄弟がおり、我々の同志が病気で起き上がれないでいると深夜密かに薬や食料を届けてくれた。我々は、革命闘争の過程の中で必ずや日本の反戦の兄弟たちと密接に協力できると信じた⁵⁷。

このような日本兵を見ていたことも、戦後共闘を働き掛け、実際にゲリラの隊列に受け入れる一因になったのであろう。

4. 戦闘部隊の日本人

(1) 幹部

元幹部の回想記に、副分隊長の日本人・阿山が1952年頃ペラ州マリム・ナワル (Malim Nawar) で10余名の戦士を率いて大衆工作を行っていたところ、1月も経たないうちに英軍が大挙して襲撃し、阿山は隊を率いて勇猛に戦った旨が記されている⁵⁸。

マ共政治局員の单汝洪 (阿海, 阿成とも) は、阿山について要旨次のように記している。

阿山こと「日本山」は技術者で、日本軍投降後、人民抗日軍「老隊」〔日本軍降伏にあたって抗日軍は、「老隊」=秘密部隊、「新隊」=公開部隊に二分された…引用者〕加入を求めてきた。彼は農民に化け、我々の農村組織の擁護下で活動を手伝った。〔1948年〕6月20日蜂起後、彼はただちに抗英軍に参加した。大学出で、銃器修理の知識があり、武器工場に配属されて地雷敷設に携わった。この工場は間もなく敵に攻撃され、阿山らは工場を無事森林の奥に移動させるとともに果敢に闘って敵軍を撃退した⁵⁹。

1954年に逮捕されて死刑判決を受けたが、のちに減刑され63年に中国に強制送還された李明も、12支隊でのゲリラ活動中に会った阿山について、要旨次のように述べている。

1949年頃、日本人の阿山同志はペラ州内での待伏せ攻撃で1人で多くの敵を倒し、表彰された。日本の投降時に埋めた武器を掘り出す際、彼は1人でこの危険な任務を引き受け、掘り出した武器を洗い、検査し、修理した。彼の武器修理技術は大変高く、多くの小型爆弾を彼が修理して使用した。仕事は大変危険で、人が手伝おうと言っても彼は断った。この勇敢で責任ある精神は、同志たちに深い感動を与えた。また、これらの武器は各区の大部隊に送られ、大きな役割を果たした⁶⁰。

1949年11月、ペラ州で8支第3独立隊「特区機構」が設立されたとき、クダ・ペナン州連絡委員会委員の阿山が3人の責任者の1人になった、との記述⁶¹もある。同一人物かどうかは不明だが、先述の

ように 8 支 3 独には日本人が 10 余人いたというから、その可能性は高い。

1970 年代初頭にマ共中央から離反したマ共「マルクス・レーニン主義派」（同じく中央から離反していた「革命派」と 1983 年に「マレーシア共産党」を結成）によれば、阿山はペラでの英軍との戦闘で死亡したという⁶²。

1972 年に 12 支隊 2 区（12 支には 1～4 区があった）がマ共中央に叛旗を翻そうとした際、指導者の阿凌（のち張忠民）が阿山に参加を促したとされる⁶³が、この「阿山」が同一人物の可能性は薄いようだ。

(2) 医師

アブドゥラー (Abdullah C. D.) マ共委員長は、回想記の中で次のような日本人医師のことを記している。

（1949 年）部隊名サート (Saat) という名の日本人医師 (Doktor Jepun) が党の命令でアブドゥラーの主治医になり、第 10 支隊幹部の治療にもあたった。彼は 1949 年 9 月 12 日、30 日の戦闘で、前線に出て果敢に戦った。その後彼は 10 支を離れた⁶⁴。

アブドゥラーの回想記第 3 部にも 1955 年頃の 10 支隊員として Saat（「秒」の意）なる人物が登場する⁶⁵が、ここには Dr. が付いていないので別人物と思われる。

イブラヒム・チク (Ibrahim Chik) の回想記に、パハン州で 1949 年の 10 支結成後植民地当局軍との戦闘が続いていた頃、日本人のサマ医師 (Dr. Sama) が医療、教育活動にあたっていた、との記述がある⁶⁶。

(3) 田中清明氏と橋本恵之氏

マ共関係者の記録は、田中氏と橋本氏について要旨次のように記している。

① 田中清明氏（部隊名・精徳）

1945 年 9 月 16 日、何人かの同僚と人民抗日軍に加入。抗英戦争勃発後、豊富な科学技術知識を生かして各種の軽量武器を設計、製造。幾多の反「包囲」作戦で果敢に戦い、地雷敷設の責任も負う。49 年 1 月のクダ北部での戦闘で、抗英部隊総司令部から表彰さる。75 年には民族解放軍総司令部から「国際主義戦士」の称号を授与さる⁶⁷。

一方、田中氏の死を報じた 2000 年 4 月 5 日付『南洋商報』『星洲日報』は、「田中は [1944 年 8 月に] マラヤの日南製鉄に派遣されて間もなくマ共の地下組織と初歩的な関係を結び、日本投降前に社内の何人かの同僚と、社内の憲兵が保管していた相当数の銃器を人民抗日軍に渡した」と記している⁶⁸。これがマ共関係者から得た情報に基づく記事か否かは分らないが、事実とすれば、田中氏は戦前からマ共と接触していたことになる。

② 橋本恵之氏（部隊名・阿福）

マ共関係文書にはすでに触れた以上の詳しい記述はないが、田中氏と同じく「国際主義の戦士」

と讃えられていたこと、「愛馬行進曲」「北国の春」などの日本の歌を隊員に紹介し、特に後者は橋本氏が「日本民歌・榕樹下」の題名で華語訳し隊内で愛唱されたこと、などが記されている⁶⁹。

(4) 戦闘で死んだ者

① 栄光

マ共政治局員・陳凱（阿和）の回想記に、要旨次のような記述がある。

1949年1月、第8支隊の独立第3分隊（兵器工場技術者として田中、橋本両氏も加わっていた）がクダ州北部でグルカ兵を含む英軍と激しい戦闘を交えたとき、「日籍同志・栄光、貴竜」が果敢に戦った。同年12月18日、ペラ州ランブタンでの戦闘で、栄光は勇猛に戦って光栄なる犠牲を遂げた⁷⁰。

② 木松

同書に、1950年12月30日、クダ州での戦闘で「軽機手（小隊長）木松同志」が犠牲になった、と述べられている⁷¹が、「木松」が日本人かどうかは分らない。

③ Manap Jepun（Manaf Jepun との記載も）

英雄的マレー人としてしばしば登場する。日本兵でも、日本企業に勤めていた日本人でもないようだったが、Jepun（マレー語で「日本」の意）の名前が気になったので調べたところ、次のようなことが明らかになった。

マナプ（馬納）同志は母親が日本人だった。当時のマレー人としては珍しく英文中等教育を受けた。抗英戦争勃発後民族解放軍に参加し、後に分隊長になった。1951年のある日、英軍高官の服装をし英語を駆使して英軍の警戒網をくぐり抜け、あるマレー農村に行きゲリラ討伐のため武器弾薬を提供するよう求め、見事に20丁余りの銃とかなりの弾薬を手に入れて帰隊した。この武勇伝は近郷の語り草になった⁷²。

1949年5月に第10支が結成された際、指導陣の補佐役についた⁷³。

10支の老同志によれば、マナプはパハン州の生れで母親は日本人だった。1952年1月25日、同州クアンタン地区のゴム園で起きた植民地軍グルカ兵との戦闘で犠牲になった。この時小隊長で、20歳前後だった⁷⁴。

マレー国民党 (Partai Kebangsaan Melayu Malaya) 3代目委員長、マラヤ社会主義戦線 (Socialist Front) 委員長を務めたイシャク (Ishak bin Hj. Muhammad) の自伝にも、マナプの名が現れる。「祖先が1800年にスラウェシ島からパハンに移り住んだフシン (Hj. Hussin) の家系から英雄 (Pahlawan) Manap Jepun が出た。…英軍との衝突で射殺された人物に Manaf Jepun… などがある」⁷⁵ との記述があるのである。父方は反植民地運動を続けた気骨ある家系で、マナプ自身も反英の闘士として記憶されていたようだ。

(5) 離隊者

① 貴竜

上記の陳凱の回想記には、すぐに続けて「貴竜は後に隊を離脱した」との注記が付されている⁷⁶。上記のように「日籍同志」とされているところからみて、裏切り行為を働いたとは見られていないようだ。その点は、先の橋本氏の言と一致する。

貴竜の入隊時期については、先に見た文献（曹啓竹の回想記。注 54 参照）に「1952 年頃」である旨が記されていたが、陳凱は 1949 年 1 月の戦闘に加わっていたと明記している。とすれば、貴竜は 1952 年に加わった一団とは別に、ゲリラ戦の初期から隊に加わっていたのかも知れない。曹は、一団の中に貴竜がいたとは直接は述べていないからである。

② 50 年代の 2 人

この数年来精力的にマ共文献の整理、回想記の取りまとめにあった元幹部・方山氏によれば、1950 年代に日本人隊員 2 人が日本に帰り、新聞も報道したという⁷⁷が、目下確認の術がない。

5.

以上のマ共側資料から判明した日本人についてまとめれば、以下のようになる。

- (1) 日本名の分る参加者：田中、橋本両氏の他、常岡達吉。
- (2) 華語名のみが記された参加者（戦死もしくは離脱が明記されている者を除く）：温和記（少佐），Chin Kian（陳建？。軍医），宏光（獣医）。
- (3) マレー語名のみが記された参加者：Dr. Saat, Dr. Sama（ともに医師）。
- (4) 戦死者：阿山（副分隊長），栄光，木松（日本人か否か不明）。
- (5) 離脱者：貴竜（医師）。
- (6) ゲリラの捕虜になるかゲリラ側に投降したが、英軍に引き渡された者：南勇一（のち獄死），石川信吾，山田。
- (7) 母親が日本人の戦死者：Manap Jepun。

むすび

マラヤ共産党ゲリラへの日本人参加者は、200 人から 400 人に上った。最後まで闘争に従事続けた田中、橋本両氏がそうだったように、マラヤを占領した日本軍が「植民地支配からの解放」の約束に反して過酷な統治を行ったとの認識から、ともにマラヤ独立のために戦ってこの約束を真に果たそうと決意したことが、最大の理由だったようだ。敗戦前からマ共との接触を求めている者もいた。日本軍が各地で武器引き渡しなどを巡って人民抗日軍と交渉を持ったことも、日本兵のゲリラ参加に道を開いた。一方、中には、戦後の連合軍による処罰を恐れて日本軍部隊を脱走しゲリラに加わった者もいたらしいことが、日本側文書から窺える。敗戦から数年間密林に潜んで近在の住民の食糧などをかすめ取る生活を続けたのち、1952 年頃ゲリラに参加した一団もあったという。

終戦から抗英戦争開始までの間、より正確にはマ共書記長ライテクがスパイ行為が露見して逃走する

までの間に、少なくとも 20～30 人、もしくは 60～70 人（いずれも陳平書記長による）がライテクの命で処刑された。抗英戦争のために入隊した日本人は、抗英戦争取り止めを決めたマ共指導部にとって負担だったこと、食糧などの調達も困難だったことによるという。これは、マラヤ解放の大義のために馳せ参じた日本人にとって最大の悲劇だった。また、抗英戦争開始後、勝手に隊伍を組んで別行動をとったとして処刑された者が 1 人いたことも、明らかにされた。

ゲリラ隊の中では、医師、技術者として重要な職責を担うものが多かった。武器、地雷などの製造、修理は彼らの指導に負うところが大きかったようだ。日本人医師が老齢化、戦死、離隊でいなくなった後、その穴は中国やベトナムで訓練を受けた若い世代が担うことになる。

何百人かの日本人ゲリラのうち、どれほどが戦病死し、どれほどが離隊もしくは投降したかは分らない。離隊した佐々木賢一氏は、「当初の 2 年半で次々に戦死した」「マラヤ独立で目標を失った」と述べ、橋本恵之氏は「1960 年代初めには 2 人だけになった」と語っている。日本人は早い段階で姿を消してしまったことが窺える。どれほどが元日本兵でどれほどが民間人だったのかも正確には分らないが、多くが軍事技術にたけていたところから見て、田中、橋本両氏のようにほとんどが軍隊経験者だったのだろう。

日本軍の公式記録に残された「逃亡者」とマ共関係者の回想記に現れる日本人との間には、1 人として共通の名を見出すことができなかった。ただ、マ共文書に現れた医師・貴竜は橋本氏によれば岩崎という名だったというから、日本軍側文書（上記 10-2）の「クダ州ビドンで逃亡した第 2 中隊陸軍衛生一等兵・岩崎哲夫」である可能性がかなり高い。

日本名を伏したまま消えていき、しかもその事実さえ日本国内ではほとんど知られていない何百人かの人々にとって、戦後はまだ終わっていないと思えて仕方がない。ここに改めて、異国の解放のために身を捧げた人々に哀悼の意を表しつつ、筆を擱く。

本稿は、2008 年度南山大学パッヘ I-A-2 研究奨励金に基づく研究の所産である。記して謝したい。

注

1. この項、原不二夫「マレーシアの残留日本兵」。アジア政経学会『アジア研究』38 巻 1 号、1991 年 10 月をまとめた。
2. 『南僑日報』1949 年 2 月 10 日。
3. 石部藤四郎『青春 憲兵 下士官石部メモ』私家版 pp. 124-127.
4. タイ公文書館文書 Mo. To. 0201. 2. 1. 57/18. クイロンは警察で、「クープー村の村長は中国匪に協力して陸稲植え付けのための開墾を手伝うとともに食料も供給している」と供述したという。村嶋英治教授からの 1995 年 12 月 4 日付 Fax. マ共は 1950 年代初頭から南タイに人員を派して食糧自給の努力をするとともに基地建設の「下見」をしていたようだ。詳しくは、原不二夫『未完に終わった国際協力：マラヤ共産党と兄弟党』風響社、2009 年、pp. 75, 77, 83, 84 参照。
5. 1996 年 2 月 2 日。
6. 本田忠尚『茨木機関潜行記』図書出版社 1988 年 p. 25.
7. 同上書 pp. 81-86.
8. 宮坂孝康氏からの聴き取り。2009 年 8 月 1 日。
9. 渡辺明彦「もう一人の日本人」http://www.nichimapress.com/07_kawauchi/2007/kawauchi29.html (2009 年 9 月 22 日検索)。
10. 納 信二「中国姓で生き抜いた 30 年」、横堀洋一 他編『南十字星記念復刻版：シンガポール日本人社会の歩み』シンガポール日本人会 1978 年 所収。pp. 556, 557. 原載は、「週刊時事」1974 年 11 月 2 日。

11. 防衛研究所図書館史料室 中央部隊歴史全般 80「マライ・ボルネオ方面部隊略歴」厚生省援護局 1961 年 12 月 1 日 所収の「第 7 方面軍野戦兵器廠部隊略歴」p. 18.
12. 同上。
13. 同上文書所収「第 46 師団野戦病院部隊略歴」p. 263.
14. 同上文書所収「第 29 軍野戦貨物廠部隊略歴」p. 194.
15. 同上文書所収「輜重兵第 94 連隊部隊略歴」p. 234.
16. 同上文書所収「独立混成第 70 旅団司令部部隊略歴」pp. 191-193.
17. 同上。
18. 同上。この 3 項に関しては「人名表別紙附表第四の如し」と記されているが、この文書にそのような「附表」は付されていない。
19. 同上文書所収「歩兵第 256 連隊部隊略歴」pp. 217-219.
20. 同上文書所収「歩兵第 123 連隊部隊略歴」pp. 254, 255.
21. 同上文書所収、「野砲兵第 94 連隊部隊略歴」pp. 225-228.
22. 防衛研究所図書館史料室 南西マレー・ジャワ 403 第 7 方面軍司令部「逃亡者連名簿」1946 年 11 月作成、による。
23. 防衛研究所図書館史料室 南西マレー・ジャワ 397「昭南憲兵隊逃亡者名簿」1946 年 11 月 22 日。
24. 防衛研究所図書館史料室 392.9 M 森開紀良編『果敢砲兵隊の思い出——隊員の手記』果敢砲兵隊の会、1982 年、所収、「失敗に終わった馬來共產党工作」(pp. 174, 175)。
25. 同上書所収、「終戦時の心境」(pp. 183, 184)。
26. 本田忠尚 前掲書 pp. 78-88.
27. 関道介『生も死も』文芸社 2002 年 pp. 257-277.
28. 原不二夫『マラヤ華僑と中国』龍溪書舎 2001 年 p. 435.
29. 新馬僑友会編『馬來亞人民抗日軍』香港見証出版公司 1992 年 pp. 300, 301.
30. 同上書 pp. 106, 107.
31. 同上書 p. 107.
32. 当時第 4 独立隊副隊長。1946 年 2~4 月「全マラヤ総工会 PMGLU」主席。46 年 4 月中国に強制送還。91 年北京で死去。
33. 見証叢書編委会編『激情歲月』香港 見証出版社 2005 年 pp. 16, 17.
34. 陳凱『回憶板吉坡人民抗日闘争』香港 南島出版社 1999 年 pp. 52-56.
35. 前掲『馬來亞人民抗日軍』p. 368.
36. Chin Peng, *My Side of History*, Singapore, Media Masters, 2003, pp. 123, 124.
37. 全仲仁『馬共内部風暴』南タイ考南康地道委員会 1998 年 pp. 108, 109.
38. C. C. Chin, Karl Hack, eds., *Dialogues with Chin Peng: New Light on the Malayan Communist Party*, Singapore, Singapore University Press, 2004, pp. 95, 96.
39. Chin Peng 前掲書 pp. 124, 125.
40. 同上書 pp. 145-148.
41. 前掲『馬來亞人民抗日軍』p. 368.
42. 方山編『見証和解与回馬』Kuala Lumpur, 方山 2002 年 pp. 204-207.
43. 邱依虹編『生命如河流：新，馬，泰 16 位女性生命故事』Petaling Jaya, Strategic Information Research Development (SIRD), 2004, pp. 81, 98.
44. 1949 年 2 月に結成された「マラヤ民族解放軍」(Malayan National Liberation Army) は、結成時には 9 支隊あり、その後 12 支隊にまで増大したが、50 年代半ばには第 8, 10, 12 の 3 支隊になった。このうち第 10 支はマレー人部隊だった。
45. 陳凱『為独立而戦』香港、南島出版社 1998 年 p. 78. / 方山編『馬泰辺区風雲録 第 1 集 根拠地重整旗鼓——新時期・新方針』Kuala Lumpur, 21 世紀出版社 2005 年 pp. 79-81.
46. 方壮璧『馬泰辺区風雲：森林遊撃生活片断』Selangor, Syarikat Kebudayaan Gunung Tahan, 2000 年 p. 34.
47. 賀巾『崢嶸歲月』香港、南島出版社、1999 年、p. 243.
48. 南タイの第 9 和平村での小強、黄堅両氏からの聴き取り。2003 年 9 月 2 日。
49. 新馬僑友会編『馬來亞人民抗日斗争史料選輯』香港見証出版公司 1992 年 pp. 173-176. (以後、『史料選輯』と略す)。
50. 『朝日新聞』1991 年 11 月 5 日夕刊。
51. 前掲 原「マレーシアの残留日本兵」pp. 83-85 参照。
52. 『民声報』(マラヤ共産党機関紙) 1946 年 7 月 1 日。

53. Ibrahim Chik, *Memoir Ibrahim Chik: Dari API keRegimen Ke-10*, Bangi, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 2004, p. 67.
54. 曹啓竹 (Selamah binti Abdullah) 『戦闘の半世紀：拉昔邁汀夫人曹啓竹回憶錄』 Petaling Jaya, SIRD, 2008, pp. 33, 34.
55. 邱依虹編 前掲書 p. 216.
56. 前掲『史料選輯』 pp. 317, 318.
57. 前掲 陳凱『回憶板吉坡人民抗日闘争』 pp. 73-81.
58. 張佐, 『我的半世紀：張佐回憶錄』 Kuala Lumpur, 張元, 2005 年, pp. 310-312.
59. 单汝洪『回憶往事』香港, 南島出版社, 2002 年, pp. 246-249. / 阿成 (单汝洪) 『從“8 扠”到抗英戦争——馬共中央政治局委員阿成回憶錄之三』 Kuala Lumpur, 21 世紀出版社, 2006 年, pp. 108-112.
60. 鄭昭賢『陳田夫人・李明後述歴史』 Petaling Jaya, SIRD, 2007, p. 26.
61. 前掲『為独立而戦』, p. 125.
62. 蔡求真『40 年森林游撃戦争生活回憶錄』 Betong, Thai, 泰南勿洞第一友誼村, 2000 年, p. 269.
63. 方山 編『歴史的告白』 Kuala Lumpur, 21 世紀出版社, 2004 年, pp. 22-27.
64. Abdullah C. D., *Memoir Abdullah C. D. (Bahagian Kedua): Penaja dan Peminpin Rejimen Ke-10*, Petaling Jaya, SIRD, pp. 131-133, 268.
65. Abdullah C. D., *Memoir Abdullah C. D. (Bahagian Ketiga): Perjuangan Sempadan dan Penamatan Terhormat*, Petaling Jaya, SIRD, p. 58.
66. Ibrahim Chik, 前掲書, p. 109.
67. 方山編『馬泰辺区風雲録第 3 集：光栄艱巨的任務』 Kuala Lumpur, 21 世紀出版社, 2006 年, pp. 43-50.
68. 同上書, p. 47 に転載。『南洋商報』『星洲日報』両紙が同じ記事を載せ, それをマ共関係者の出版物が転載したことは, この記事の内容をマ共関係者が肯定していたことを示すと思われる。
69. 前掲『見証和解与回馬』 pp. 198-203.
70. 前掲『為独立而戦』, pp. 78-80, 126.
71. 同上書, p. 88.
72. 「見証叢書」編委会編『古城硝烟』香港, 香港足印出版社, 2008 年, pp. 127-131.
73. Ibrahim Chik, 前掲書, p. 100. ここでは Manaf Siwang (Manaf Jepun) と記されている。
74. 方山氏からの 2008 年 9 月 7 日付 e-mail。
75. Ishak Haji Muhammad, *Memoir Pak Sako: Putera Gunung Tahan*, Bangi, Penerbit Universiti Kebangsaan, 1996, pp. 38, 198.
76. Ibrahim Chik, 前掲書, p. 80.
77. 方山氏からの聴き取り。2005 年 12 月 30 日, クアラルンプールにて。